

不老不死

海洋研究開発機構などの研究チームでは、青森県・八戸沖の海底下にある約46万年前の地層から、生きた微生物を大量に採取することに成功したそうです。

採取された微生物は、推進1200メートルの海底から、更に200メートル掘削した地層に生息しており、極めてゆっくりとエネルギーを消費するため、寿命は数千年単位と見られています。研究チームによると「過酷な環境を超省エネで生き抜いてきたのだろう（10月11日付朝日新聞）」と考えているようですが、それにしても、「数千年単位の寿命」というのは驚きです。

一方、人間の方は、遙か昔から不老長寿を願い、涙ぐましい努力を重ねてきましたが、人生80年時代に入り、長生きの人が増えてきたとはいえ、せいぜい120歳位が寿命の限界でしょう。

中国ではその昔、徐福という人が、不老不死の妙薬を求めていた始皇帝から蓬莱へ行き仙人を連れてくるように命じられますが、無論、探し出すことはできません。このため、始皇帝の怒りを恐れた徐福はそのまま日本に亡命した、という話が残っています。現世では絶対的な権力を恣にした始皇帝ですが、しかし、不老不死の妙薬だけは手に入れることができませんでした。

しかし、考えてみれば、一生に限りがあるからこそ、人は如何に生きるべきかを考えることができるので、もしも終わりのない世界に生きるとしたら、それはそれで地獄ではないかと思えます。

日本人は、第一次世界大戦後、明らかに若返ってきたといえます。私が就職した頃の頃、30代の先輩がいましたが、彼が今の時代にタイムスリップしてきたら、きっと50代と思われるでしょう。

若返りの要因は、食生活が改善され栄養状態が良くなったことにあるといわれていますが、このほか、医療技術の発展、福祉制度の充実などによって、健康で、長生きのお年寄りが増えてきたことは、日本の誇るべきところですよ。

しかし、こうした中にあっても人々のアンチエイジングへの欲望には限りがありません。特に、女性の若さへの執着は、始皇帝も顔負けではないでしょうか（失礼！）。世の中には、健康食品が溢れかえっていますし、スポーツジムも花盛りです。お陰で、日本は世界の先進国の中で、最も高齢化率が高い国になりました。

とはいえ、人々は、ただ単に長く生きることだけを望んでいるわけではないはずです。生きている限りは、命の炎を燃やしたい、何事かをなしたい、世の中の役に立ちたいといった思いが、人それぞれにあるのではないのでしょうか。

昔々、かぐや姫が月の国に戻るとき、帝に手紙と不老不死の薬を残していきますが、帝は、かぐや姫に再び会うこともない身で不老不死の薬が何になろうとって、日本で一番高い山（富士山）の山頂で焼くように命じました（竹取物語）。

人は、ただ長く生きればそれで良いというものではない、生きていく甲斐が必要なのだと思います。

先日、落語界の風雲児、立川談志師匠が亡くなりましたが、70歳を過ぎて、病魔と闘いながら、なお現役の役者を通したその一生は、見事としかいいようがありません

なかなか、彼のように振る舞うことはできませんが、与えられた命を燃やし尽くしたいという思いだけは、負けてはいないつもりです。

（塾頭 吉田 洋一）